

1. はじめに

1917年夏、『無情』の連載を終えた李光洙は、京城日報社から依頼をうけて朝鮮半島南部を旅行し、朝鮮語新聞『毎日申報』に54回にわたって「五道踏破旅行」を連載した。22年後の1939年8月、李光洙はこの紀行文を『金剛山遊記』（1924）と合わせて『半島江山』というタイトルで刊行し、序文にこう書いた。

全州からあと、私は『京城日報』にも紀行文を書けと頼まれて、そこから木浦まで行くあいだは両方の新聞に書いた。ところが木浦で赤痢にかかって苦しんだあとは、木浦・多島海・慶州などの紀行文は『京城日報』に連載する分を私が書き、『毎日申報』は、当時そこにいた友人沈友燮君が翻訳することになった。それで、この部分にはいくらか文体の差があった。それを、このたび出版するにさいし、私が病中にあるため、友人である崔貞熙女史が修正して、私の文体に近くなるよう文体統一をしてくれた。この文章に対する沈・崔お二人の努力は感謝のレベルを越えており、三人の合作だと言ったほうが正しいのである¹。

これによれば、李光洙は「五道踏破旅行」を『毎日申報』に連載する一方で、全州から先は『京城日報』にも日本語で「五道踏破旅行」を書いた。木浦で入院したあと、木浦・多島海・慶州の紀行文は日本語でのみ書き、それを沈友燮が朝鮮語に訳して『毎日申報』に載せた。そのために生じた文体の差を、『半島江山』を出すにあたって、崔貞熙が李光洙の文体をまねて統一させたというのである。

三中堂の『李光洙全集』に入っているのは崔貞熙が修正した『半島江山』版であることを、朱耀翰が「解説」で明らかにしている。この「解説」のなかで朱耀翰は、『毎日申報』の連載がはじまると読者に歓迎されたので、『京城日報』からも依頼がきて、李光洙は途中から日本語でも書きはじめたと説明している²。しかし実際には、両社は連名で予告を出したあと、1日違いで連載を開始した。『京城日報』の連載は全部で35回、そのうち全州までの連載は5回である。では、この5回はいったい誰が書いたのだろうか。

大村益夫と布袋敏博が朝鮮近代文学における日本語作品をあつめた『近代朝鮮文学日本語作品集』（全23巻 緑蔭書房）の『1901～1938 評論随筆篇』第3巻（2004）には、京城日報版「五道踏破旅行」が収められている。この巻を刊行する前年に布袋敏博は朝鮮学会で日本語版「五道踏破旅行」を紹介し、全州からあと日本語でも書いたというのは李光洙の「記憶違い」で、じつは最初の回から自分で書いたのだろうと推論した³。根拠として布袋は、全州到着までの連載5回分の文章と全州以降の文章がともに流麗な候文で書かれ

¹ 『半島江山』（永昌書館1939）序文、『李光洙全集』第16巻、三中堂、1963、315頁

² 『李光洙全集』第18巻、518～9頁

³ 「李光洙『五道踏破旅行記』小考—朝鮮語版と日本語版の比較研究—」第54回朝鮮学会発表文要旨、2003。布袋は2008年8月にソウル大学で開催された韓国現代文学会でも同じ内容の発表をおこなった。「二重言語の

李光洙—「五道踏破旅行記」論」、『韓国現代文学と日本』韓国現代文学会第3次全国学術大発表大会資料集、2008

ていて文体の違いが見られないことを挙げている。しかしながら、連載の途中で文体が変われば読者が違和感をいだくから、当然のことながら李光洙はそれまでの文体を踏襲したであろうし、編集局も配慮したはずである。

そもそも 1917 年という年は、李光洙にとって忘れられるような年ではなかった。この年に『無情』で一躍文名をあげた李光洙は、一方で死に至る病である肺結核を発病し、それをきっかけに、のちに伴侶となる東京女子医専の学生、許英肅と出会った。『半島江山』を刊行した年に、許英肅はある雑誌のインタビュー記事で李光洙が五道踏破旅行に出たときのことを生き生きと語っている⁴、李光洙自身も「無佛翁の憶出」のなかでこの時期を回想している⁵。「五道踏破旅行」は李光洙がはじめて新聞に発表した日本語文である。まして当時は『半島江山』刊行のために集めた資料を見ていたはずであり、自分で書いたかどうかを間違うとは考えられない。本発表では、李光洙の記憶が事実であることを前提として、「五道踏破旅行」が日朝両語によって書かれ、掲載された経緯を精察してみたい。

2. 全州まで

『京城日報』に連載された「五道踏破旅行」の 35 回分のテキストと、『毎日申報』に連載された 54 回分のテキストを、別表のように整理して通し番号をつけた。日本語版は以下の 6 つの部分に分けられる。(別表参照。括弧内は通し番号)

- ① 全州よりまえの 15 回 (1~5)
- ② 全州からあとの 7 回 (6~12)
- ③ 木浦で書かれた 1 回 (13)
- ④ 多島海巡りの 4 回 (14~17)
- ⑤ 晋州・統営の紀行文 5 回 (18~22)
- ⑥ 慶州での 13 回 (23~35)

李光洙が全州に着くまえの日本語版連載①は、「湖西より」2 回と「其の美景、其の感慨」2 回の計 5 回である。この部分は李光洙が朝鮮語で書いて送ってきた「第一信」から「第七信」までを、新聞社の誰かが日本語に訳してまとめたものであろう。当然ながら内容も使用語彙も共通している。だが詳しく見れば、やはり違うところがある。

「湖西より」第 1 回には朝鮮語の「第一信」と「第二信」内容が入っているが、島村抱月について述べる態度に顕著な違いが認められる。南大門駅を出た李光洙は、同じ汽車に乗り合わせた島村抱月にインタビューをし、「第一信」で詳しく報告している。文学とは人間の「思想感情」を「語と文」によって表わしたも

⁴ 「나의 自叙傳」『女性』1939.2、27 頁。許英肅は、李光洙の体力が旅行に耐えられないことを心配して、彼を恩師に診断してもらい、大丈夫と言われて送り出した。それなのに木浦で発病したと知り、非常に心配したと語っている。

⁵ 「無佛翁の憶出」1、2、『京城日報』1939.3.11、12。『近代朝鮮文学日本語作品集 1939~1945』評論・随筆篇 3 所収。ただし、中村健太郎から依頼書翰を受け取った時期を『開拓者』連載のころとしたり、京城日報の松尾編集局長が初号三段で二面の上段頭記事にして出してくれたとか(実際と少し違う)、徳富蘇峰が直接ほめてくれた内容が実際の文章には見当たらないなど、李光洙が記憶違いしている部分もかなり見られる。

のだが、朝鮮語の文法や文体はまだ完成されていないようだから、まず「語文を整頓」し、それに合うように小説、詩、劇などの諸形式を移植して「新文学建設」すべきだろうという抱月の真面目な意見は⁶『京城日報』の「湖西より」ではすっぱりと省略され、代わりに強調されるのは須磨子の養女まで連れて一行の疲れきった様子である。「御自身達は芸術の為と申すかも知れぬども、傍から見れば矢張旅役者にて、寧ろ気の毒なる感じが致候」などという感想は、まさに芸術とは無縁な人間の「傍から」の感想であり、芸術の側に身をおく李光洙の感想とはみなしがたい。同様に、「うず高く積まれた荷物を見て、「其の中にはカチュシヤの御かづらも御衣装も這入って居るかと思えば、何となく可笑しくなるを覚え候」のような茶化した表現も、抱月への敬意にみちた「第一信」とは調子を異にする。

百済の古都扶余での見聞を美文でつづった第4回と5回「其の美景、其の感慨」の内容は「第五信」から「第七信」までに該当する。いくつかの段落の冒頭部分が二行見出しとして使われているのは、『京城日報』の記事でよく見られる形式である。おそらく日本語文を作成した人物がこの形を好んだのだろう。文体の特徴として「薫りたるもの」「慄えたるもの」「其の夜」「此の瓦」など、詠嘆のための体言止めが多用されているが、これは李光洙のほかの日本語文には見られないものである。そのほかに、佳増里にある有史以前の墓地を鑑定した学者「黑板博士」を「鳥居氏とやら」と書き違えているのも、日本語文作成者のミスであろう。

それにしても「五道踏破旅行記者李光洙」という筆名をつけて連載を始めておきながら、『京城日報』は、なぜ李光洙に書かせなかったのか。編集局としては、李光洙の日本語の実力も、朝鮮人読者を対象にした彼の論説と小説が好評であることも承知していたが、日本人読者を対象とした文章が書けるかどうかには不安があったのだろう。日本語の文章を巧みに書けることと、日本人読者に喜ばれる文章を書けることは違うからである。その点、日本人スタッフが日本人読者の好みに合わせて李光洙の文章をリライトすれば安全である。送られてきた原稿をその場で日本語に訳してまとめればよいと簡単に考えたのに、予想とちがって、リライトが意外な労力を要したのではないだろうか。実際、扶余についての李光洙の文章を短時間であれだけの日本語美文にまとめる作業はたいへんだったはずである。負担に耐えきれないと判断して、全州から先を李光洙に書かせることにしたのではないかと、筆者は推測する。

編集局は最初の5回で李光洙に「お手本」を示したともいえる。抱月の文学理論を紹介する李光洙の筆致には多分に啓蒙臭がただよっている。だが朝鮮半島の日本人読者はそんなものは望んでいないし、芸術に無関心な人間にとっては抱月も「気の毒な旅役者」に過ぎないことを、リライトによって編集局は李光洙に思い

⁶ 朝鮮から帰国後、抱月は『早稲田文学』（1917年10月号）に「朝鮮だより 僕のページ」を書いて、京城で「崔君、秦君、沈君、金君、玄君、その他三四名」と会って話をしたことを書いている。全員が阿部充家の信奉者であったという。抱月は、朝鮮には詩も小説も劇もないと思っており、朝鮮の若者に「真の感情を本とした文芸を作り出させたい」と望んでいた。しかし彼の念頭にあった言語は日本語だった。「要するに私は純粋な朝鮮の伝統を享けた若い人々の中から文学的価値ある日本語で真の朝鮮民族の靈魂を呼び生かしてそれに面接したいと思う、朝鮮人の手に成る真文芸を見たいと思う（傍点引用者）」と、彼は書いている。偶然にも抱月は、朝鮮文学における最初の近代長編を生みだしたばかりの朝鮮人、李光洙と出会っていたわけである。だが李光洙が報告しているインタビューの内容は「朝鮮だより」の抱月の考えとは少し違っている。李光洙が自分の考えを勝手に投影させたのかもしれない。

知らせたのである。候文という形式については、途中から李光洙にひきつがせることを想定していた編集局が、李光洙が手紙で常用している候文を取り入れた可能性もあるし、李光洙ともあらかじめ相談のうえでこの文体に決めていたとも考えられる。

それでは、実際に最初の5回を書いたのは誰だったのだろうか。扶余からの朝鮮語原稿をもとにして、あのような美文に作り上げることができるのは日本語ネイティブしか考えられない。当時の京城日報には中島司（中島生）、奥田直毅（鯨洋）、藤村忠助（藤村生）などのほか、編集局長格の中村健太郎（三笑居士）がいた⁷。朝鮮語が堪能なのは中村だが、李光洙の原稿は漢字語の多い国漢混用文で書かれているから、ある程度朝鮮語がわかる者なら訳すことは可能である。というわけで残念ながら、誰が書いたかは現在のところ特定できない、というのが今回の結論である。

3. 全州から

李光洙が日本語でも書けという知らせを受け取ったのは7月2日、裡里か全州でのことだったと推測される。全州に到着したあとの李光洙は、猛烈な勢いで朝鮮語の「全州에서」と日本語の「湖南より」を書き始める^②。これらのテキストを対照すると、どちらかがどちらかの底本であり翻訳だとみなすのは難しく、はじめからそれぞれの言語で書かれたものだと考えられる。典型的な例は、裡里がいかなる町であるかを詩的に表現した部分であろう。「未だ眼も鼻も付かぬ、血の塊と申すべきか、日に月に太るのみにて形も定まらざる怪物」と、「將次 그림을 그릴 양으로 여기저기 繪具를 찍어 바는 듯하여 아직 一定한 形狀도 없는 두루물실（描こうとして絵具を塗ったくっっているような、まだ一定の形状もないもの）」というように、同じ内容がまったく違う形で表現されており、どちらもその言語で創りだされた文章であることを示している。この回ではまた内容面でも、朝鮮人の商業が振るわない理由を「内地人」の態度に帰して改善を求めるなど、朝鮮語版にはない文言が見られる。

裡里のあとまわった光州と羅州では、歓迎会と見学がつづいて原稿を書く余裕がなかったらしい⁸。木浦で赤痢のために入院した李光洙は、そのあとようやく「光州에서」3回と「木浦에서」1回を書いている。このとき日本語で書かなかったのは、体力と気力がなかったためであろう。

4. 入院以後—木浦・多島海

李光洙が病床で書いた日本語の詫び状は、編集局にいた沈友燮によって朝鮮語に訳され、『京城日報』と『毎日申報』に同時掲載された^③。見ての通り、沈友燮の翻訳は、漢語をそのまま漢字語として用いた、ほぼ直訳である。

⁷ 沈元燮「1910年代中盤 日本人記者들의 朝鮮紀行文 研究」『現代文学의 研究』第48集、韓国文学研究学会、2012、II、III章／沈元燮（2014）「일본제 조선기행문과 이광수의 <오도답과여행>」、『現代文学의 研究 52』、韓国文学研究学会／鄭晋錫「제 2의 朝鮮總督府 京城日報」、『京城日報』第1卷、韓国図書センター、2005、viii～xi頁

⁸ 『毎日申報』「光州 五道踏破旅行記者」1917年7月13日付記事／「羅州에서」同月14日付記事 参照

りよくいんふか びょういん びょうしょう いっぴつけいじょうつかまつり ゆう らしゆ もつぼえきちやく たすうじんし
緑蔭深きフレンチ病院の病床より一筆啓上仕候。十二日夕、羅州より木浦駛着。多数人士の
でむかえ うけもうし とちゆう ふくつう おぼ げり もよお ぐあいあ すす ままにゆういん ちりょういた いたし
出迎を受申候。途中、腹痛を覚え、下痢を催し、具合悪しく勧めらるゝ儘入院治療致すことに致
候。(13「湖南より」)

綠陰이 깊은 후란치 病院 病床에서 一筆 聲上하나이다. 十二日 夕 本郡 到着, 郡守 以下多數 人士의
出迎을 受하였는데 腹病으로 因하여 即時 入院하였소이다. (17「木浦에서」)

ひきつづき沈友燮は、李光洙が日本語で書いた「多島海巡り」4回を朝鮮語に訳して『毎日申報』に掲載
した④。表を見ればわかるように、執筆日付が同じものが『京城日報』の3、4日あとに『毎日申報』に掲載
されているが、これが翻訳のための時間差とみられる。一例を挙げる。

て ふ ぼうし ふ あたま ふ べつ お もつぼ じんし あと わ じゅんてんまる じょじょ たか
手を振り、帽子を振り、頭を振りて、別を惜しまるゝ木浦の人士を後にして、我が順天丸は徐徐と高
しま びようぶ ごと ぜつべき とうえい ふ くだ てんか ぜつげいたとうかいさ はし い たとうかい
い島の屏風の如き絶壁の倒影を踏み砕き、天下の絶景多島海指して走り出で候。(14「多島海
めぐり
巡」執筆日7月23日／掲載日7月26日)

手を 擧하며 帽子를 擧하며 頭를 振하여 別을 惜하는 木浦의 人士를 後로 하고 我順天丸은 徐徐히
高島の 屏風과 如한 絶壁의 倒影을 踏過하여 天下의 絶景 多島海를 指하고
走出한다. (22「多島海一」執筆日7月23日／掲載日7月29日)

5. 「嶺南より」と「統營より」

多島海巡りをおえたあと、李光洙は晋州と統營で「晋州より」「統營より」と「統營에서」「晋州에서」
を書いた⑤。これらの朝鮮語文は流れるような名文で、沈友燮による直訳とは明らかに違っており、李光洙
が自ら書いたものと判断される。統營で閑山島を訪れるくだりを見てみよう。

署長과 卞警部の 好意로 警備船을 타고 閑山島 구경을 갔다. 兪郡守, 卞警部와 本社의 宋分局長의
同伴이다. 天無雲 水無波한 데 이름조차 곱다란 警備船 第四鵲丸은 밀까지 보일듯이 透明한 綠水를 가볍게 헤친다. 航行 約 四十分에 병목 같은 水門을 들어가니 橢圓形의 透明한 灣內에 두어 隻 漁船이 떠있고 瓶 밑이라 할 만한 곳에 오뚝 솟은 半島가 鬱蒼한 樹林 속에 묻혀있다. 山 모양이 어찌 그리도 妙하며 물빛이 어찌 그리도 고운고. 即時 端艇을 타고 制勝堂을 向할제 深林에 철이 이름인지 매암의 소리가 噪噪하다. 斷崖를 더우잡아 水軍提督 李忠武公의 碑를 拜하고 鳥鵲이 지저귀는 古祠 곁으로 良久히 徘徊하면서 堂을 지키는 老人의 說話를 半은 듣고 半은 못들었다. (31「統營에서」)

かとうしよちよう こうい けいび せんたい かさぎまる かんざんとう むか めいしやうりしゆんしん こうせき かた せいしやうどう み
加藤署長の好意にて、警備船第二 鵲丸にて閑山島に向う。名將李舜臣の功績を語る制勝堂を見
んとにて候。風穩かに波静かなり。梟の如く可愛き警備船は、這るが如き碧波の上を走ること約四十
分。瓶の口の如き水門を入れれば、腹の膨れたる花瓶の形をなせる小湾あり。湾の南端にして瓶の底に当
ところ ざつぼくしげ えんすいじやう みさき せいしやうどう ところ ぼーと こ
る所、雑木茂れる円錐状の岬が制勝堂のある処にて候。端艇を漕いで絶壁の下に着け、樵道を攀じ
はしらかたむき せいしやうどう なが しゅうぜん て た かべ くず たんせい ほ どう まも ろうおうい きたり
て柱 傾ける制勝堂に入る。長く修繕の手を絶ちて、壁は崩れ丹青は剥がる。堂を守る老翁出で来り
むしろ すす と まま しゅじゅ かた いで
て 蓆を薦め、問うが儘に種々と語り出候。

点線下線の部分は、日朝それぞれの読者のために別に書きこんだものである。また下線部分は、同一の行動や対象を述べながらも表現が異なっており、一方が一方の原本であり翻訳であるというのではなく、それぞれの言語で考えられた文章であることを示している。多島海で体力を回復した李光洙は、また両言語で書きはじめたのである。多島海のと『毎日申報』と『京城日報』の掲載順序が逆転して朝鮮語版の掲載が先になっていることも、この事実を傍証する。

ところで、表を見て気づくのは、掲載の順序と執筆日に混乱が生じていることである。第一に、日本語版では晋州-統営の順で掲載され、朝鮮語版はその逆の順序で掲載されている。理由は不明である。あるいは原稿の遅れが関係しているのかもしれない。第二に、晋州と統営での執筆日が異なっている。そもそも日本語版の執筆時とされている8月初めには、李光洙は現地にもういなかった。どうしてこんな混乱が生じたのか。その原因は、多島海のとの旅程を検討することで明らかになる。

三千浦に到着した李光洙はまず晋州に向かい、つぎに統営で李舜臣の故地を訪れた。そして、そこから船に乗って馬山に着き、そのまま三浪津から釜山を通過して東萊温泉に直行した。これは、毎日申報社と京城日報社が共同主催していた「東萊海雲台探涼団」に合流するためである。団体に同行していた阿部充家に東萊で再会した李光洙は⁹、温泉で体を休めたあと、海雲台で三日ほど休暇をとった¹⁰。そして、ふたたび釜山に出てから馬山、大邱を通って最後の目的地である慶州に向かったのである。

日本語版の執筆日付とされている8月初めの数日間、李光洙は海雲台で休暇を過ごしていた。そうやって体力を回復させながら李光洙は、書きかけていた紀行文「嶺南より」と「統営より」を、この海雲台で完成させたと思われる。そして執筆の場所は原稿を書きはじめた晋州と統営に、執筆時は原稿を書きおえた8月初めにしたのである。こんな変則的な形をとることで、李光洙は執筆時と場所を記載する自らの習慣に正確を期そうとしたのだろう。

6. 慶州にて

8月15日、自転車慶州入りした李光洙は、18日まで慶州と仏国寺を精力的にまわって「新羅の旧都に遊ぶ」全13回を『京城日報』に連載する^⑥。それらはまたもや沈友燮によって翻訳され、「徐羅伐에서」と題して『毎日申報』に掲載された。4日間で原稿13回分という強行軍であるから、李光洙は朝鮮語で書くのが精いっぱいだったことだろう。東京で結核を発症し、木浦で赤痢のために入院した李光洙にとって、この旅は体力との戦いであった。旅をつづけることがどれほどきつかったかは、紀行文のあちこちから伝わってくる。以下は最終回の終わりに近い部分である。

めいかつじょう なんざんじょう とも れきしじょうじゅうよう こせき そうい ひすで く しんたい ひろうまたそ
明活城も南山城も共に歴史上重要な古蹟には相違なかるべきも、日已に暮れて身体の疲労又其の
きょく たつ はくりつじ すうちょうひがし せきだっかい りょう さんばい ゆうき ま
極に達す。柏栗寺より十数町東にある昔脱解の陵さえも参拝する勇氣はなく、況してや西川を隔てゝ
ぎょくじょうか きんゆしん はか せつ きんじんもん はか い ぶんぶおうりょう きぼほあいおな き
玉女峰下なる金庾信の墓(一説には金仁間の墓なりと云う)は文武王陵と規模略相同じと聞きたるのみに
まんぞく え しらぎ きゅうと あそ
て満足せざるを得ず候。(35「新羅の旧都に遊ぶ=十三=」)

⁹ 『毎日申報』1917年8月8日「東萊温泉에서」

¹⁰ 『毎日申報』1917年8月10日「海雲臺에서」

明活城, 南山城 共히 歴史上 重要な 古蹟됨에 無違하나 日已暮하고 身體의 疲勞도 亦其極에 達하였고 栢栗寺로부터 東方 四五里地의 昔脫解王陵에도 參拜할 勇氣가 없으니 況 西川을 隔하여 玉女峰下 金庾信墓(一說에는 金仁問의 墓라 함)는 文武王陵과 規模가 略相同하다는 말만 듣고 満足치 아니할 수 없다. (54 「徐羅伐에서十三」)

単行本を出すにあたって、李光洙はこのように生硬な直訳文を直そうとしたが、またもや病気のため果たせず、今度は崔貞熙の手を煩わせることになった。以下はその修正版である。

明活城, 南山城도 함께 歴史上 重要な 古跡임은 틀림없으나, 해가 지고 身體의 疲勞도 못찾고 栢栗寺로부터 東方 半리가량 되는 昔脫解王陵에도 參拜할 기운이 없다. 그러므로 玉女峯아래 金庾信墓에도 못갔다. 그 墓와 文武王陵과 비슷하다 함을 듣고 구경한 거나 마찬가지로 満足한다.¹¹

李光洙を尊敬する作家崔貞熙が李光洙の文体を模倣した、興味深い資料である。

7. おわりに

『無情』のなかで、遺書を残して姿を消した英采を追って平壤にきた李亨植は、はじめてこの町に来たときのことを思いだして、こう考えた。

あのとき亨植は十一歳だった。平壤という地名と、平壤がよいところだという話は聞いていたが、平壤がどんな都会か知らなかったし、平壤に牡丹峰や清流壁があることも知らなかった。亨植はそのころ「四書」と「史略」と『小学』は読んでいた。しかし当時は学校というものがなかったので、朝鮮地理や朝鮮歴史を読んだことはなかった。文明国の子供だったら平壤の歴史と名所と人口、それに産物も知っていたことだろうに、と亨植は考えた¹²。(『無情』56節)

中村健太郎から紀行文を依頼する手紙を受け取ったとき、李光洙は書いたばかりのこの一節を思い浮かべたのではなかろうか。新聞に紀行文を書くことは、朝鮮の人々に朝鮮各地の「歴史と名所と人口、それに産物」を知らせる好機であった。許英肅の心配を押して旅行を決意した李光洙の心には、この旅が朝鮮の文明化に役立つという使命感があったのである。

では『京城日報』に日本語で紀行文を書くのは何のためなのか。自分の行動につねに大義名分をたてる癖がある李光洙のことだから、当然この問いへの答えも準備したはずだ。朝鮮人の立場から見た朝鮮の実情を日本当局にわからせて朝鮮の現状改善を訴えること、朝鮮の歴史の深さと自然の素晴らしさを日本人読者に知らしめること、そのために書くというのが彼の答えだったと思われる。もちろん、そこには自分の才能を世間に誇示したい若者らしい名誉欲や野心もあったであろうが、彼の行動が民族を思う心から出ていることは疑うことができない。その使命感と野心の同居が総督府の御用新聞に利用されたという点を指摘する研究者は多いし、たしかに否定はできないが、前年の秋に阿部充家と会って『毎日申報』に論説文を発表し始め

¹¹ 『李光洙全集』第18巻、三中堂、1963、195頁

¹² 『李光洙全集』第1巻、三中堂、1962、145頁、拙訳

たときから、李光洙はその危険を自覚していたはずである。総督府の機関紙に書くことは、相手に利用されながら相手を利用するという綱渡りのような行為であった。日本語版「五道踏破旅行」で李光洙は総督府の「新政」が成功していることを称賛する一方で、朝鮮の農村の貧窮と飢餓や地主の搾取、朝鮮商人と日本商人の確執なども書き込み、また朝鮮人の芸術的能力を産業に結びつけるようにという提言もおこなった。何よりも、素晴らしい名文で朝鮮の文化と歴史を誇示した。新聞を通して施政者に意見を伝え、人々の暮らしの改善に反映させることを願う李光洙にとって、この綱渡りはやるだけの価値が十分ある「取引 (bargaining)」であったと思われる¹³。

「五道踏破旅行」の日本語版と朝鮮語版の2つを同時に書いたことが李光洙に与えた一番大きなものは、日本人読者と朝鮮人読者を対象に書く場合のスタンス変更を実地に体験したことだったと思う。李光洙はこのときはじめて本格的に日本人読者と向き合った。読者たちは何を知っていて、何を知らず、何をもっと知りたくて、何を知りたくないのか。彼らはどんなものを読みたいと欲しているのか。読者のニーズを先取りして書くジャーナリスティックな姿勢は、のちに東亜日報の編集局長をつとめながら大衆の人気作家として君臨する李光洙の創作方法に大きな影響をあたえている。これはまた、四半世紀ののちに李光洙が日本語と朝鮮語で文章を書くようになったときに、いったい誰を対象として書いたのかという問題にもかかわってくる。若いときに身に着けたスタンス変更の技術を彼はずっと持ちつづけたであろうからだ。

[参考文献]

- 柴崎力也 (1983) 「徳富蘇峰と京城日報」、『日本歴史 425』
- 김현주 (2001) 「근대 초기 기행문의 전개 양상과 문학적 기행문의 '기원」、『現代文学의 研究 16』、韓国文学研究学会
- 布袋敏博 (2003) 「李光洙<五道踏破旅行記>小考—朝鮮語版と日本語版の比較研究」、第 54 回朝鮮学会発表文要旨
- 並木真人 (2003) 「朝鮮における「植民地近代性」・「植民地公共性」・対日協力」、『国際交流研究 5』
- 並木真人 (2004) 「植民地期朝鮮における「公共性」の検討」、『東アジアの公論形成』、東大出版会
- 鄭晋錫 (2005) 「제 2 의 朝鮮總督府 京城日報」、『京城日報』第 1 卷、韓国図書センター
- 李鍊 (2006) 「朝鮮總督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」、『メディア史研究 21』
- 並木真人 (2007) 「大衆の国民化と民族化—植民地期朝鮮の事例から」、『国際交流研究 9』
- 정혜영 (2009) 「<오도답과여행>과 1910 년대 조선의 풍경」、『現代小説研究 40』
- 布袋敏博 (2008) 「이중언어의 이광수 <五道踏破旅行記>론」、『韓国現代文学会第 3 次全国学術大発表大会資料集』
- 咸苔英 (2011) 「1910 年代朝鮮總督府機関誌と徳富蘇峰」、『アジア文化研究 37』、国際基督教大学
- 김재관 (2011) 「<오도답과여행>에 나타난 일제 식민지 교통 체계 연구」、『語文論集 46』、中央語文学会
- 심원섭 (2012) 「1910 年代中盤 日本人記者들의 朝鮮紀行文 研究」、『現代文学의 研究 48』、韓国文学研究学会
- 沈元燮 (2014) 「일본제 조선기행문과 이광수의 <오도답과여행>」、『現代文学의 研究 52』、韓国文学研究学会

¹³ 並木真人 (2003、2004、2007) 参照